

国史跡指定記念

三好長慶生誕五〇〇周年記念

飯盛城跡調査報告会

クローズアップ

飯盛城

2022

資料集

四條畷市教育委員会 四條畷市立歴史民俗資料館 大東市 大東市立歴史民俗資料館

題字：甲斐規予子

クローズアップ飯盛城 二〇二二 資料集



国史跡指定記念

三好長慶生誕五〇〇周年記念

飯盛城跡調査報告会

クロズアップ

飯盛城

資料集

四條畷市教育委員会 四條畷市立歴史民俗資料館 大東市 大東市立歴史民俗資料館

題字：甲斐規予子

クローズアップ 飯盛城 2022

大東市と四條畷市は、平成 28 年度から飯盛城の調査を継続しています。今回の報告会では「飯盛城跡研究の歴史」をテーマに、これまでに確認された過去の調査資料から飯盛城を読み解きます。



日程

日時：令和 4 年 7 月 23 日（日）午後 1 時～午後 4 時 30 分（受付午後 0 時）

会場：四條畷市市民総合センター 市民ホール



プログラム

- 13：00～13：05 開会 挨拶 神本 かおり
(四條畷市教育委員会スポーツ・文化財振興課課長)
- 13：05～13：45 報告 1 「残された資料からたどる飯盛城跡の姿」
李 聖子（大東市生涯学習課学芸員）
- 13：50～13：55 報告 2 「昭和 42 年度飯盛城跡発掘調査を掘り起こそう!!」
古家 百恵・佐藤 凜・新羽坪 里花・松下 美桜
(大阪府立四條畷高等学校生徒)
- 14：00～14：40 報告 3 「四條畷高校地歴考古学クラブが拓いた
飯盛城跡研究」
實盛 良彦（四條畷市教育委員会スポーツ・文化財振興課主任）
- 14：40～14：55 休 憩
- 14：55～16：25 記念講演「城郭革命としての飯盛城
- 石垣・山城居住・聖地 -」
中井 均（滋賀県立大学名誉教授）
- 16：25～16：30 閉会 挨拶 家村 幸一（大東市生涯学習課課長）
- 16：30 終了



目次

プログラム	2
目次	3
飯盛城跡と三好長慶	4
縄張り図	5
報告1 「残された資料からたどる飯盛城跡の姿」 李 聖子（大東市生涯学習課学芸員）	6
報告2 「昭和42年度飯盛城跡発掘調査を掘り起こそう!!」 古家 百恵・佐藤 凜・新羽坪 里花・松下 美桜 （大阪府立四條畷高等学校生徒）	12
報告3 「四條畷高校地歴考古学クラブが拓いた飯盛城跡研究」 實盛 良彦（四條畷市教育委員会スポーツ・文化財振興課主任）	14
記念講演「城郭革命としての飯盛城 - 石垣・山城居住・聖地 -」 中井 均（滋賀県立大学名誉教授）	20
三好氏関連略年表	28
用語解説	30



三好長慶生誕500周年記念 関連行事

大東市立歴史民俗資料館 特別展

「三好長慶と大東市の中世 —飯盛城はそのとき—」

開催期間：令和4年10月15日（土）～12月11日（日）

休館日：第1・3火曜日

開館時間：9:30～19:30 入館料：無料

問合せ：大東市立歴史民俗資料館

大東市野崎3丁目6番1号 TEL：072-876-7011

飯盛城跡と三好長慶



飯盛城跡

飯盛城跡は大阪府大東市・四條畷市にまたがる飯盛山の山頂に築かれた戦国時代末期の山城跡です。城域は東西約400m、南北約700mを測り西日本有数の規模を誇ります。

享禄3年(1530)に木沢長政の居城として文献上はじめて登場し、永禄3年(1560)には天下人・三好長慶が居城とします。そして京都と五畿内を支配する三好政権の拠点であるだけでなく、「飯盛千句」という歌会を催すなど文化交流の場ともなりました。現在に残る城跡は飯盛城が城郭としての機能を失う永禄12年の頃の姿を留めていると考えられます。



平成28～30年度にかけて行われた飯盛城跡の総合調査では石垣や瓦葺、礎石建物の存在が明らかとなりました。この3つの要素が取り入れられるのは織田信長が築城した岐阜城や安土城築城(織豊系城郭)からと考えられています。飯盛城はそれらに先行して石垣や瓦葺、礎石建物を取り入れた稀有な事例です。

国の文化審議会でこのような飯盛城跡の歴史的価値が認められ、令和3年10月11日に国の史跡に指定されました。



三好長慶(1522-1564)

三好長慶は今からちょうど500年前の大永2年(1522)2月13日に曾祖父三好之長の代からの三好氏の居城とされる阿波国芝生城(徳島県三好市)で生まれたといわれています。その後幼少期は当時守護所が置かれた勝瑞城館(徳島県藍住町)で過ごしたと考えられています。

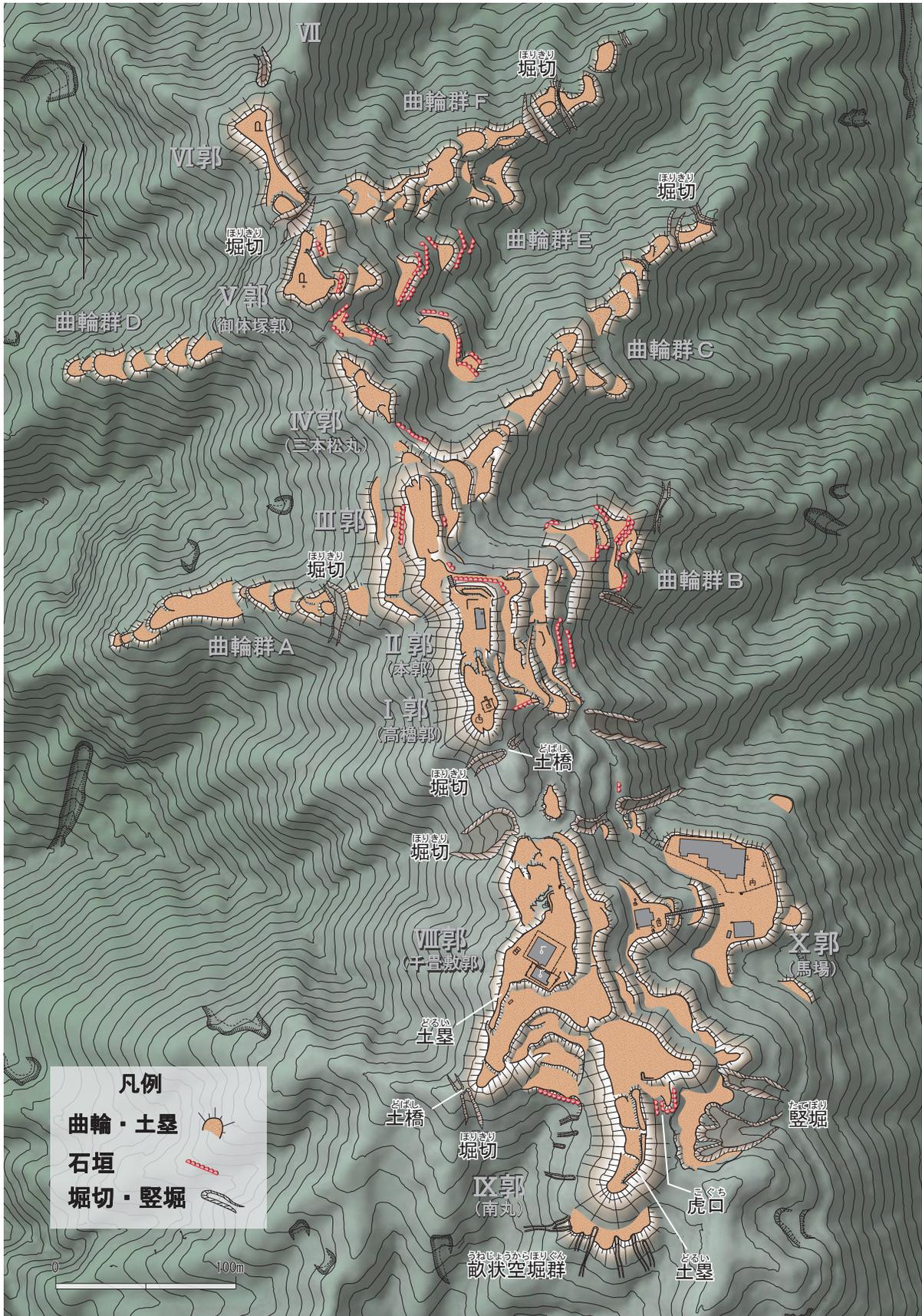
長慶は室町幕府13代将軍足利義輝を京都から追放し、政治の実権を握った武将で、飯盛城には永禄3年(1560)に入城しました。永禄6年には三好長慶が飯盛城下でのキリスト教布教を許可し、この後河内でキリスト教が広がる契機となっています。また、同時代のキリスト教宣教師の文献などには「天下を治めていた」、「天下の支配者」などとして登場し、近年織田信長に先駆ける最初の天下人と評価されています。



永禄7年(1564)長慶は飯盛城内で没し、その死は3カ年の間隠され、永禄9年(1566)6月に真観寺(八尾市)で葬礼が行われました。



縄張り図



残された資料からたどる飯盛城跡の姿

大東市 産業・文化部生涯学習課
李 聖子

はじめに

大東市・四條畷市は平成28年度から3か年にわたり共同で飯盛城跡の国史跡指定を目指して総合調査を実施しました。令和3年には飯盛城跡の歴史的価値が認められ国史跡に指定されました。史跡指定後も飯盛城跡の保存・活用を見据えて継続して調査を実施しています。飯盛城跡は貴重な歴史遺産ですが、自然環境等を楽しむ場としても親しまれています。そのため、飯盛山では古くから観光のための整備などが行われており、その過程で残された記録があります。

今回の報告会では、最新の調査成果と併せて、撮影された写真や図面等の残された資料から「ちょっと昔」の飯盛城跡の姿をたどります。

1. 石垣測量調査

1) 石垣69 (写真1～写真4)

位 置：Ⅰ郭（高櫓郭）とⅡ郭（高櫓郭）の東側帯曲輪斜面

規模・構造：総延長約44.2m・最大高約3.1m、使用された石材約1800石
構築当時の天端が現存。出隅（隅角部）を有し、石垣の背面には栗石が充填されている

特 徴：石垣を高く積むため、石垣69の上に平坦面を設け、2段目の石垣1を積んだ段築状石垣。石垣69上の平坦面は帯曲輪として機能した。上段の石垣1と比較すると小ぶりな石材を使用。

2) 石垣6・7 (写真5～写真8)

位 置：Ⅲ郭の曲輪15西斜面

規模・構造：長さ約22m・最大高約2.5m、使用された石材約400石
構築当時の天端と根石が現存し北側の一部が段築状となっている。裏込めは確認していない。

特 徴：比較的大きな石材が用いられ、間詰石は少ない。

2. 資料からたどる城跡の姿

1) 残された資料

- ・近世資料・・・近世地誌、絵図
- ・飯盛山の開発に関連する資料・・・パンフレット、絵はがき、写真
- ・調査で得られた資料・・・調査記録、写真、縄張り図、測量図面

2) 飯盛城跡の近代開発略史

年代	事柄
大正4年(1915)頃	大阪府立四條畷中学校(現・大阪府立四條畷高等学校)による四條畷神社～IV郭(三本松丸)登山道整備
大正7年(1918)	四條畷中学校2代校長 青木氏の登山300回達成を記念し「登山三百回記念碑」をV郭(御体塚郭)に建立
大正13年(1924)	東宮(後の昭和天皇)御成婚記念事業として四條畷中学校3代校長 牧田氏により「飯盛山史蹟碑」がVII郭に建立される *碑文は郷土史家・平尾兵吾氏によるもの
昭和5年(1930)	東大阪電気鉄道株式会社が飯盛山上遊園地建設
昭和6年～8年(1931～1933)	大阪府による四條畷神社からの登山道整備
昭和12年(1937)	北河内郡小楠公会により楠木正行銅像がI郭(高櫓郭・山頂)に建立
昭和14年(1939)	北河内郡の警防団員の奉仕により国旗掲揚台がI郭(高櫓郭)の小楠公銅像北側に建設される
昭和19年(1944)	戦時下の金属回収のため小楠公銅像が供出される
昭和30年(1955)	日蓮宗寺院妙法寺が楠公寺と改称しX郭(馬場)に移転
昭和33年(1958)	大東市が野崎観音・飯盛山苑地整備計画に着手し展望台をII郭(本郭)に建設
昭和38年(1963)	国定公園整備事業として阪奈道路から分岐し、中の池と桜池を経由する飯盛山までのハイキング道を整備
昭和41年(1966)	国定公園整備事業の第2期工事として野崎観音から飯盛山までのハイキング道(七曲りコース)を整備
昭和46年(1971)	NHK 飯盛山 FM 送信所がVIII郭(千畳敷郭)に建設される
昭和47年(1972)	昭和8年に整備されたハイキング道が昭和47年7月豪雨(大東水害の要因となった豪雨)により崩れ廃道となる
同年	地元住民により楠正行銅像が再建される
昭和53年(1978)	四條畷市により四條畷神社から山麓をたどり御机神社から飯盛山までのハイキング道が整備される
平成元年(1989)	FM802の送信所がNHK 飯盛山FM送信所の西側に建設される
平成13年～15年(2001～2003)	北生駒地域ネットワーク整備のため野崎観音から飯盛山までのハイキング道(七曲りコース)の整備を実施
令和2年(2020)	NHKによるNHK 飯盛山FM送信所のメンテナンス工事

3) 残された資料からわかること(写真13-1～15-2、資料1～3)

- ・飯盛城跡の姿→現在では、所在不明の遺構や開発前の城跡の記録が多く残されており、遺構の詳細を知ることができます。
- ・自然環境の変化→残された写真から植生の変化を知ることができます。

おわりに

近・現代に残された資料からは、断片的ながら飯盛城跡の変遷をうかがうことができます。これらの資料は今後、飯盛城跡の保存や活用のための整備を検討するうえで貴重な資料といえます。

参考文献

大東市教育委員会・四條畷市教育委員会 2020年『飯盛城跡総合調査報告書』



写真1 石垣 69 全景



写真2 石垣 69 隅角部 (出角)



写真3 石垣 69 石垣天端の状況



写真4 石垣1 (左上) と石垣 69 (右下)



写真5 石垣 6・7



写真6 石垣 6・7 上空から



写真7 石垣 6・7 一段目隅角部



写真8 西斜面下の曲輪から石垣 6・7 を望む



写真9-1 Ⅲ郭からⅡ郭を望む



写真9-2 飯盛山古写真（大阪府教育委員会提供）



写真10-1 石垣69



写真10-2 飯盛山古写真（大阪府教育委員会提供）



写真11-1 石垣94付近



写真11-2 飯盛山古写真（大阪府教育委員会提供）



写真12-1 虎口



写真12-2 飯盛山古写真（大阪府教育委員会提供）



写真 13-1 西山麓より飯盛山を望む、昭和5年頃（大阪府教育委員会提供）



写真 13-2 四條畷学園本館屋上で撮影、昭和10年頃か（四條畷学園提供）



写真 13-3 四條畷学園で撮影、昭和10年頃か（四條畷学園提供）



写真 13-4 四條畷学園短期大学清風学舎屋上から撮影、令和4年



写真 14-1 南西より山頂（I郭）を望む、昭和5年頃（大阪府教育委員会提供）



写真 14-2 四條畷学園短期大学清風学舎屋上から撮影、令和4年



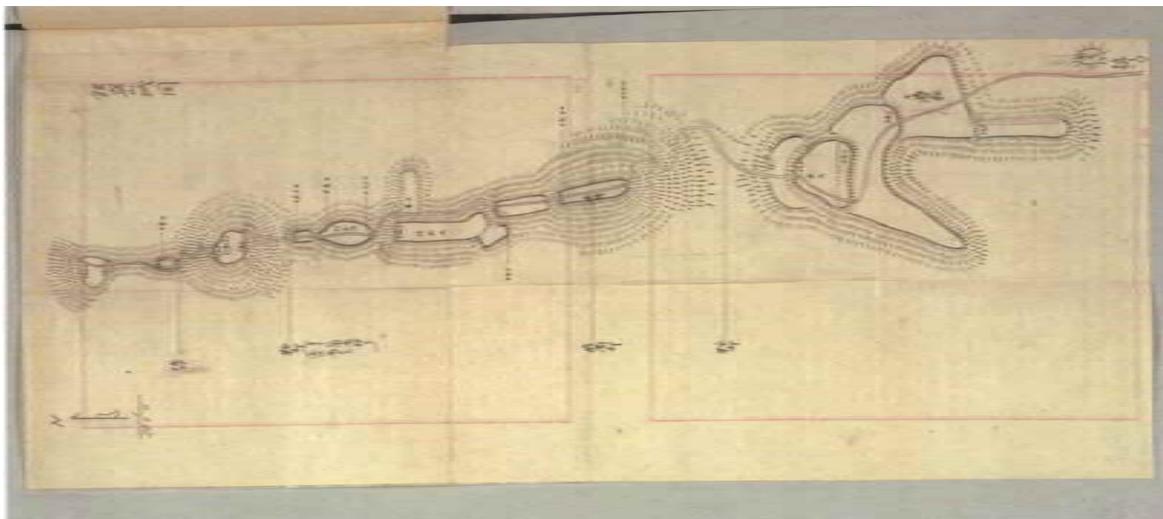
写真 15-1 Ⅲ郭からⅤ郭を望む、昭和5年頃（大阪府教育委員会提供）



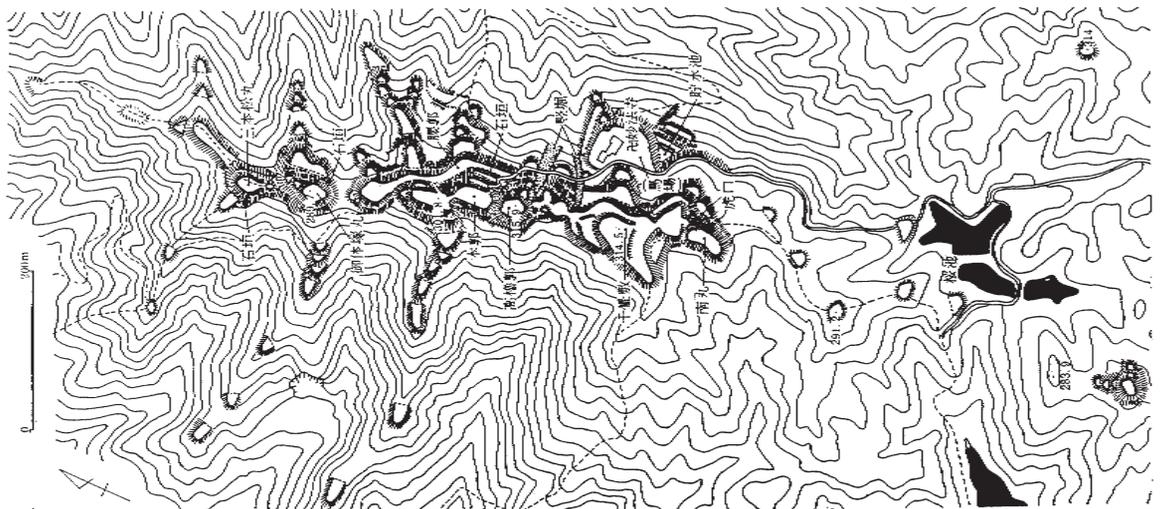
写真 15-2 Ⅲ郭上空からⅣ郭・Ⅴ郭を望む、平成30年頃



資料1 河内国飯盛旧城絵図（「美濃加納永井家史料」東京大学史料編纂所所蔵、『飯盛城跡総合調査報告書』より）



資料2 飯盛山城図（陸軍築城本部編『日本城郭資料』第24冊所収 国立国会図書館所蔵）



資料3 飯盛城跡縄張り図（1981 中井均作図）

昭和 42 年度飯盛城跡発掘調査を掘り起こそう！！

大阪府立四條畷高等学校生徒

古家 百恵・佐藤 凜・新羽坪 里花・松下 美桜

1. 探究チャレンジについて

- ・「探究チャレンジ」は、探究活動を学ぶ授業の科目名
- ・探究活動とは
- ・探究活動で身につく力

2. 四條畷高校地歴考古学部について

- ・昭和 25 年 4 月に発足
- ・実際に飯盛城に赴き、発掘を行っていた
- ・四條畷高校地歴教室に資料が残る
 - ・発行されていた部誌
 - ・発掘された遺物

3. 研究方法と現在の活動

- ・遺物の整理
 - ・古いラベルの交換
 - ・洗浄作業
 - ・分類
- ・目録作成
- ・考察

4. 今後の展望

- ・発掘場所の機能を検討する
- ・現在の予想



写真1 四條畷高校に眠っていた遺物



写真2 地歴考古学部が存在した当時の写真をまとめたアルバム



写真3 遺物を整理している様子



写真4 遺物を包んでいた新聞紙から遺物を取り出す



写真5 遺物を発掘場所を記録したラベルと共にチャック付きの袋に整理する



写真6 遺物を洗浄している様子

四條畷高校地歴考古学クラブが拓いた飯盛城跡研究

四條畷市教育委員会
實盛良彦

1. 四條畷高校地歴考古学クラブの歴史

大阪府立四條畷高等学校に考古学クラブが誕生したのは、昭和25年4月のことでした（第1期）。クラブでは顧問片山長三さんの指導により四條畷市更良岡山遺跡や枚方市田口山遺跡、同穂谷遺跡などの調査を行っており（大阪府立四條畷高等学校記念誌委員会編2006）、昭和20年代の日誌の写しによれば、昭和28年12月25日と、29年3月～4月に飯盛城跡の調査も行っていました。

その後、一時クラブは休眠状態にありましたが、昭和39年4月に山口博さんを顧問に迎え、坂元直哉さんを中心に地歴考古学クラブ（当初は同好会）として復活しました（第2期）。のちに二度目の休眠期を経て再復活し、少なくとも平成16年頃まで地歴部として活動していました（第3期）。



図1 片山長三さん（昭和23年）



図2 山口博さん（昭和49年）



図3 飯盛城跡 V郭（御体塚郭）から
I郭（高櫓郭）を望む（昭和28年頃）



図4 クラブによる記念祭（文化祭）での
調査成果展示（昭和29年10月23日）

※図1・3・4・9・10は大阪府立四條畷高等学校提供。図12・13は同校蔵・四條畷市教育委員会撮影。

3. クラブによる飯盛城跡発掘調査

坂元さんの卒業後もクラブでは飯盛城の調査を継続し、昭和42年には5月と12月に「東の丸一の曲輪」において発掘調査を実施しました。翌年に報告書をガリ版刷りで刊行しており（東の丸調査報告係編1968）、後に部誌において報告がなされました（岩田・江藤・出口・藤原1969）。調査スナップ写真、調査日誌、出土遺物の一部が現在も四條畷高校社会科教室に保管され、内容を知ることができます。それらによれば、調査は5月3日と12月16日～22日に行われました。5月の調査はトレンチの規模と断面図を記録しており、地表下約30cmで「花崗岩風化物」を確認し地山（自然に堆積したとみられる土壌）と認識しました。刀の目貫とみられる銅製品が出土し、注目に値します。12月にはトレンチ2カ所を設け、それぞれ一辺1mの正方形グリッドを設定し、掘削は深さ5cmごとに人為的に土層を分割し、グリッドと土層ごとに遺物を取り上げ、出土位置を記録しました。図面に「垂心」の記載があり、平板を用い測量していました。最終的に地表下約30cmで花崗岩風化土を確認しましたが、そこからも土器が出土したことを今後の課題として報告しました。出土遺物も一部略図と



図8 発掘調査状況のスケッチ（八木良蔵さん画・鉛筆・昭和42年12月）

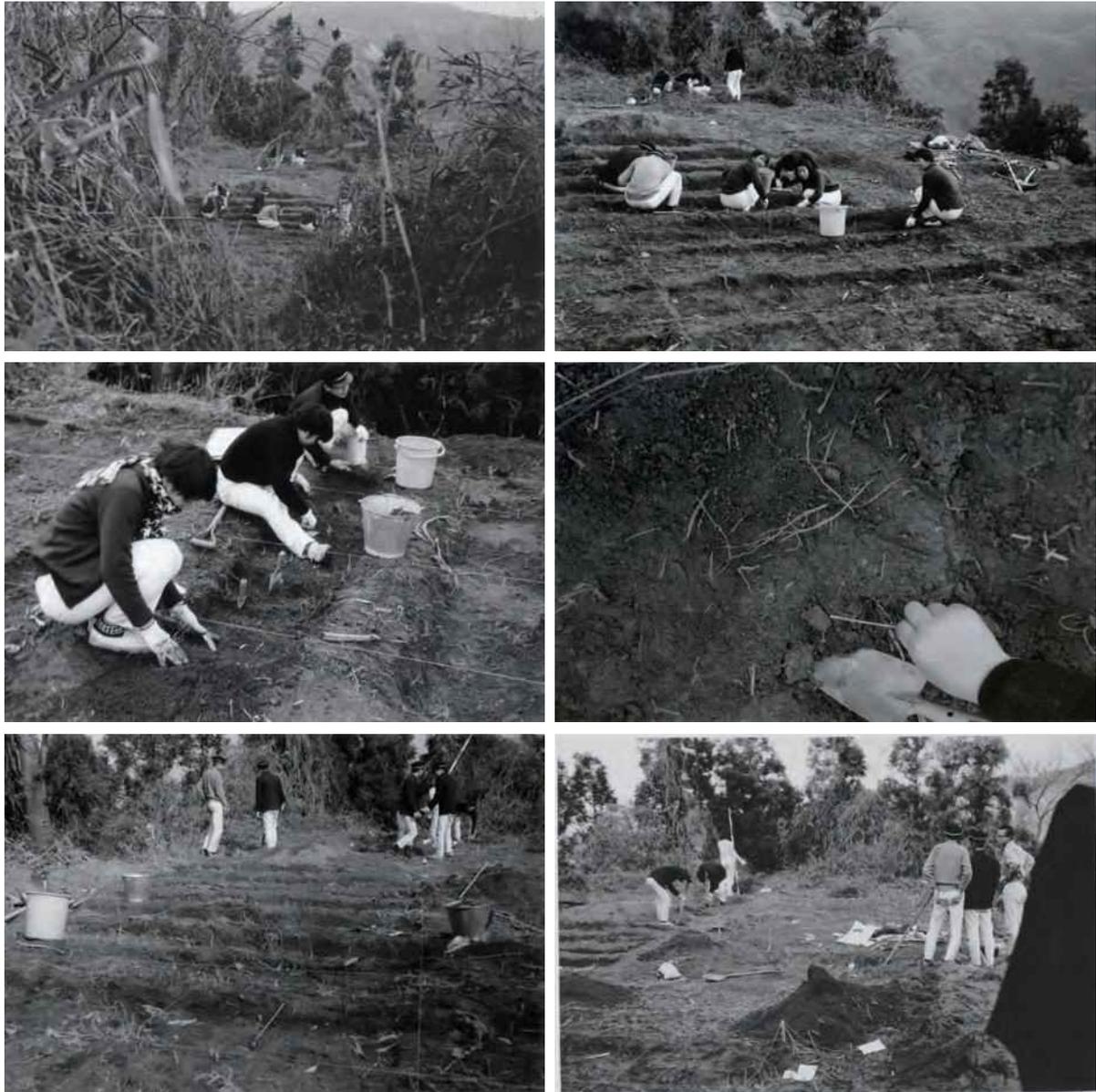


図9 発掘調査状況写真（昭和42年12月22日）



図10 躰高祭（文化祭）での活動報告（昭和42年9月29日～10月1日）

計測値を載せ報告しており、土師器・瓦質土器を含む土器片 352、瓦片 9、鉄釘 34、白磁 1、貨幣 1 のほか、円筒形の銅製品や、キセルなどが出土しました。これ以前の踏査採集遺物も略図とともに報告し、その中に土器とともに採集した銅銭、**刀の鏢部分の金具である切羽**とみられる銅製品などが含まれていました。また、「廃御机神社」採集とされるものが数点あり、実物には墨書きの注記があるため昭和 20 年代採集品の可能性があります。これは江戸期の南野村文書に「飯盛山二ノ丸に鎮座」とされる(山口 1990)、飯盛山北麓の字宮谷で採集したものと考えられます。

こういった中で部活顧問である山口博さんが坂元さんと共同で研究発表を行い(山口・坂元 1967)、引き続いて自費出版の四條畷町史と(山口 1968)、四條畷市制施行後の市史に成果を掲載し(山口 1972)、城跡の内容が広く知られるようになりました。

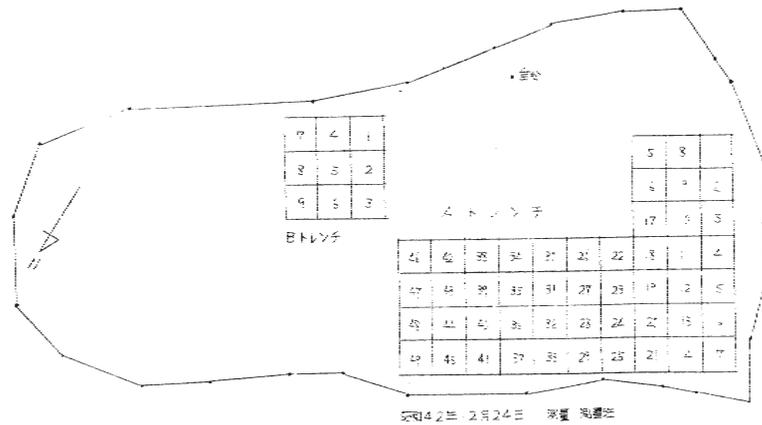


図 11 昭和 42 年 12 月調査トレンチ配置図 (岩田・江藤・出口・藤原 1969 より、縮尺 1 : 200)

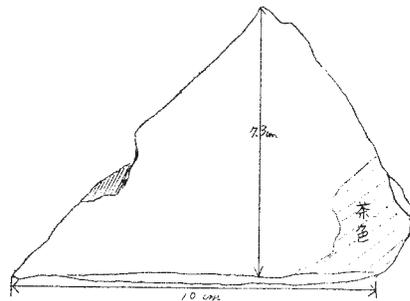


図 12 出土・採集遺物
(上：目貫・切羽など。下：碁石・キセルなど)



図 13 V 郭採集の磚
(上は 1968 報告図)

4. クラブによる調査の意義と展望

四條畷高校の生徒による飯盛城跡の調査の特徴は、学生を主体とした活動でありながら、考古学的にみても十分な情報を得ていることです。**飯盛山の主尾根以外にも城跡の曲輪が広がることを初めて確認**し、報告したのはこれらの学生たちでした。図化を伴うことで客観的具体的な報告が心がけられており、現代の視点からみても価値の高い報告です。山頂付近が木々で覆われる以前の記録として、またNHK 飯盛山 FM 送信所が建設される以前の状況を示す資料として貴重な内容を含んでいます。

なかでも昭和42年12月の発掘調査は、当時考古学分野で標準だった**平板測量**の手法で調査地区の図化をおこない、**人工的に層序を分ける**ことで部員間の土層観察経験の浅深を克服し、**遺物出土位置と層位が細かく記録**されていました。その出土遺物は、来歴の知れない資料や、出土地が伝聞されたのみの資料とは異なり、**出土位置や状況が正確にわかる第一級の考古学資料**と言えます。

今後、さらに研究を進めていくことで、調査された曲輪の機能の検討や、主要な曲輪との比較などを行うことができるであろうと考えています。

※元部員の坂元直哉さん・大下隆さん・江藤敬直さん・野間康三さんから資料の提供を得ました。出土銅製品の鑑定は村瀬陸さん（奈良市教育委員会）の協力を得ました。記して謝意を表します。

参考文献

岩田美奈子・江藤敬直・出口和美・藤原ひろみ1969「飯盛城址の研究—飯盛城東ノ丸一ノ曲輪調査報告—」『古流』第4号、四條畷高校地歴考古学クラブ。

大阪府立四條畷高等学校記念誌委員会編2006『畷百年史』大阪府立四條畷高等学校創立100周年記念事業実行委員会。

大阪府立四條畷高等学校「畷八十年史」編集委員会編1987『畷八十年史』大阪府立四條畷高等学校同窓会。

坂元直哉1967a「飯盛城」『日本城郭全集』9、大阪・和歌山・奈良篇、人物往来社。

坂元直哉1967b「河内飯盛山城」『城春』第8号、日本城郭近畿学生研究会。

坂元直哉1968「河内飯盛城」『城』第47号、関西城郭研究会。

四條畷高校地歴考古学部（坂元直哉編）1965「飯盛城址の研究」『古流』第1号、四條畷高校地歴考古学部。

四條畷高校地歴考古学部（坂元直哉編）1966「飯盛城址の研究（二）」『古流』第2号、四條畷高校地歴考古学部。

東の丸調査報告係（岩田美奈子・江藤敬直・出口和美・藤原ひろみ）編1968『飯盛城東の丸一の曲輪調査報告』地歴考古学クラブ。

山口 博・坂元直哉1967「河内飯盛城」『城と陣屋』13号、日本城郭協会近畿支部研究会。

山口 博1968「河内飯盛城」『四條畷町の歴史』。

山口 博1972「中世の四條畷」『四條畷市史』第1巻、四條畷市役所。

山口 博1990『四條畷市史』第4巻、四條畷市役所。

李 聖子編2020『飯盛城跡総合調査報告書』大東市教育委員会・四條畷市教育委員会。

城郭革命としての飯盛城

－石垣・山城居住・聖地－

滋賀県立大学名誉教授

中井 均

はじめに

戦国時代の山城は長く土の城と考えられてきた。文字通り土から成る防御施設として認識されてきた。ところが近年の発掘調査や詳細な分布調査によって西国では数多くの城跡から石積みが発掘されるようになった。こうした事実からもはや戦国時代の山城は土から成る施設ではないことは明らかである。

さらにこれまでの戦国時代の山城のあり方として、山城は防御空間であり、普段は山麓に構えた居館を居住空間とする二元的構造であると理解されてきた。その典型例が越前の一乗谷朝倉氏遺跡である。越前の戦国大名朝倉氏の居館である義景館跡は山麓に堀を巡らせて構えられた居館であり、その背後の山頂には詰城である一乗谷城が構えられていた。ところが戦国時代後半には山城部分にも居住空間が構えられていたことが近江の小谷城や清水山城の発掘調査で明らかとなった。

このように1970年代以降戦国時代の山城研究は発掘調査の成果、縄張り調査、文献史料調査などから飛躍的に進んだが、最近の調査成果から再検討する段階に来ていることはまちがいない。

飯盛城跡では総合調査によって発掘調査や詳細分布調査が実施され多大な成果が明らかとなっている。ここではそうした飯盛城跡の調査成果を城郭史上に位置付けることにより飯盛城跡の特質を探ろうとするものである。

1. 戦国時代の城郭石垣と石積み

戦国時代の山城で近年の発掘調査や分布調査で石垣や石積みの用いられていたことが確認されている。ここでは最初に石垣と石積みについて確認しておきたい。北垣聰一郎氏は隅部のあるものを石垣、築石部のみで隅部を持たないものを石積みとされた（北垣聰一郎 1987『石垣普請』法政大学出版社）。

一方、筆者は背面に裏込め石（栗石）を充填させるものを石垣、地山や盛り土面に直接石を積むものを石積みとした。当然ながら裏込めを充填す

るものは高く積むことができるが、裏込めのない石積みは高く積むことができない。高石垣の出現は裏込めを充填することによって可能となったわけであるが、そこには職能集団としての石工たちの存在も重要である。石垣とは裏込めを用いて積むことのできる職能集団が存在することによって成立したとも言えよう。

高く積み上げることができない石積みは土墨の裾部に2～3段程度積むもので、土留めとして用いられたものと考えられる。近年の調査で確認された石垣の大半はこの石積みであり、裏込めを充填させる石垣の検出事例は極めて少ない。戦国時代の山城で近年数多くの石垣が検出されており、もはや土から成るものとは言い難いとしたが、実はその大半は石を積んでいるとはいえ、石積みなのである。

さらに興味深いことにこうした石積みも長野県松本市周辺を北限として、それより北方の関東・甲信越・東北ではほとんど見ることができない。東国は土から成る城であった。こうした土造りによる築城は近世城郭にも影響を与えている。

ところが飯盛城跡に残された石垣では背面に裏込め石を充填させていることは石材間の隙間からもうかがうことができ、石積みでないことは確認できる。つまり戦国時代ではまだ数少ない石垣であることがわかる。

戦国時代の山城で明らかに石垣を用いるのは近江守護六角氏の居城観音寺城と、六角氏と関わりの深い佐生城、小堤城山城、三雲城などである。観音寺城では金剛輪寺所蔵『下倉米銭下用帳』の記録より弘治2年(1556)には石垣の存在したことが知られる。

一方、織田信長も自らの居城には石垣を導入しており、永禄6年(1563)に築いた小牧山城で発掘調査の結果石垣によって築いていたことが明らかとなっている。また、永禄10年(1567)築城の岐阜城でも石垣を用いている。そして天正4年(1576)築城の安土城ではほぼ城域のすべてが高石垣によって築かれている。

飯盛城の石垣は永禄3年(1560)に三好長慶が本拠とした段階に築いたものと考えられる。それ以前に居城としていた芥川城の石垣が極めて部分的な使用であるのに対して城域のほぼ全体を石垣としていることに発展過程をうかがうことができる。

この飯盛城の石垣の石材は飯盛山の花崗岩を用いており、岩盤の摂理に沿って割り取っていたことは李聖子氏によって明らかにされているところである。

ここで注目しておきたい点は巨石を部分的ではあるが用いていることである。最大のもは長辺が1.5mを超えるものであり、城道に対して虎口

となる部分に用いられていた鏡石と見られる。また、南虎口でも正面に対して右脇の石垣の石材は方形を意識した大振りのものでやはり虎口に対する鏡石と見てよい。こうした巨石使用は芥川城の大手谷筋に構えられた石垣にも認められるもので、長慶の築城に導入された石垣には鏡石として意識的に巨石を使用していたことがうかがえる。

私が注目する点はもうひとつある。それは石垣に折を設けていることである。折を設けるのは土塁も含めて、横矢を掛けるための迎撃施設として捉えられることが多い。もちろん虎口に対して明確に折を

設ける土塁、石垣の墨線はこうした横矢掛けの迎撃施設として構えられたものである。しかし、飯盛城の場合、主郭東辺の長大な石垣に何ヵ所か設けられているのであるが、その規模は極めて小さく、石垣の上部で城兵が横矢を掛けるようなスペースはない。むしろ長大な石垣が築石だけでは崩れる可能性が高いため、あえて折を設けて隅角部を造り出すことによって崩落を防いだ技術的な施設であった可能性が高い。(写真1、写真2)

こうした崩落を防ぐ目的で構えられた折は徳川大坂城の南外堀などで顕著であり、日本城郭の石垣構築の技術的な施設として評価出来るもの



写真1 飯盛城石垣の折



写真2 観音寺城の直線的な石垣

である。

なお、石垣の背面に栗石が確認できることより飯盛城は石垣として評価できるが、加えて鏡石の配置、墨線に折を設ける技術から石積みに関わる職能集団が築城に関わっていたことは間違いない。そうした職能集団がどこから動員されたのかが今後の研究の課題となるだろう。

2. 山城に居住する

冒頭に述べたように戦国時代の山城は住む施設ではなく、防御としての戦う空間であった。そのため山頂部から検出される遺構は倉庫などに使用された小規模な掘立柱建物が大半である。

ところが戦国時代後半になると山城部分からも巨大な礎石建物が検出されるようになる。近江守護六角氏の観音寺城では山上の本丸、平井丸、池田丸からそれぞれ数棟の礎石建物が検出されている。特に池田丸では曲輪いっぱいにも巨大な礎石建物が構えられていた。同じく近江の事例であるが湖北の戦国大名浅井氏の小谷城からも山上の大広間と呼ばれる曲輪から巨大な礎石建物が検出されている。また、西近江の高島七頭の惣領である越中家の清水山城からも山頂主郭で御殿と見られる礎石建物が検出されている。

こうした戦国時代後半に山頂部分から礎石建物が検出された山城では山麓部に居館も構えられている。また、発掘調査は実施されていないが方形に区画された曲輪は居住施設として利用されていたと考えられる山城として一乗谷朝倉氏遺跡がある。

どうも戦国時代後半になると守護や戦国大名は山上に居住施設を設けるようである。但し、重要な点はこうした山頂部分に居住空間を構える山城では山麓部にも居館が構えられている構造である。山麓、山上いずれにも居住空間を設けるのはそれぞれに違う用途が存在したためと考えられる。

恒常化する戦争は一国単位の大規模なものとなっていくなかで、女性や子供などをはじめから安全な山城に住まわせるようになったのではないだろうか。織田信長を岐阜城に訪ねたルイス・フロイスは誰も登ることを許されなかった山上に招かれ、そこで信長に仕える妻と子供に会ったと報告している。岐阜城も発掘調査の結果、山麓部で信長居館と呼ばれる居住空間が検出されている。

戦国大名クラスの居城では戦国時代の後半になると、公的な儀礼空間として山麓居館を主殿とし、私的な居住空間として山城に常御殿を構えたものと見られる。

長慶が飯盛城の前に居城としていた芥川城では発掘調査の結果、主郭か

ら御殿と見られる礎石建物が検出されている。飯盛城では千畳敷と呼ばれる広大な曲輪からも礎石と見られる石材が検出されている。芥川城のように整然と並ぶ礎石は検出できなかったが、これらは近代以降の攪乱とみられ、本来は千畳敷に礎石建物が配置されていたことはまちがいない。(写真3、写真4)



写真3 清水山城主郭礎石建物

一見すると芥川城や飯盛城での山上居住も観音寺城や小谷城と同じような構造と捉え、山上を常御殿と考えるのは早計である。両者には根本的な違いが認められる。それは山麓居館の有無である。実は芥川城も飯盛城も山麓に居



写真4 飯盛城千畳敷

館と考えられる伝承地、地籍の痕跡が一切認められないのである。つまり芥川城、飯盛城ともに主殿、会所となる施設と常御殿となる施設は一体として山上に構えられていたこととなる。

2021年の発掘調査で岐阜県の大桑城、篠脇城から山上で庭園と見られる遺構が検出されて話題となったが、芥川城、飯盛城ともに山城に御殿を構えていたが、庭園も山上に設けていた可能性が高い。こうした山上での御殿のあり方はそれまでの室町的な将軍邸、守護所の否定であり、長慶による新たな築城として評価できよう。

ちなみに織田信長の居城である小牧山城、岐阜城、安土城では石垣を用いているが、山麓に居館を構えている。信長はこの3城で、高石垣、瓦、天主を備える城郭を築くが、いずれもが山城で山麓に居館を持つ構造は二

元的構造を脱していないことがわかる。長慶は信長の築城とは違う新たな城郭を指向していたのであろう。

3. 聖地としての城郭

近年の著しい城郭研究成果のなかで考古学、文献史学のいずれもが注目するものとして聖地と城郭という視点がある。これまでの城郭研究では城は交通の要衝であるとか、軍事的要衝に築かれるものとして理解されてきた。しかし、守護の山城では近江六角氏の観音寺城が西国観音霊場の観音正寺に築かれていたり、出雲の戦国大名尼子氏の富田城が式内勝日高守神社の社地に築かれている。これらは偶然ではなく、地域の信仰の聖地に城を築くことにより守護が信仰の場を守ることを領民に示すために城郭を構えたものと考えられる。

一方で城郭のなかに聖地を取り込んで城の守護としたものも確認できる。永禄12年(1569)に山科言継が岐阜城に信長を訪ねた際に、言継は信長に「上之権現」を案内されたと記している。この「上之権現」こそ、現在復興天守の前面にそそり立つ岩盤に建てられていたものではないかと考えている。本来城郭の曲輪は削平して平坦面を確保することとしているが、岐阜城の本丸は平坦となっていない。岩盤を削り残しているのである。これは明らかに意識的に削り残して何らかの施設として利用していたものと見られる。

信長の居城は小牧山城が間々乳観音降臨の霊場に築かれている。岐阜城も伊奈波神の故地であった。信長は斎藤道三の稲葉山城を引き継ぐがその際に本丸の造成で岩盤を削り残して磐座とし、そこに権現社を祀ったのであろう。築城とともに聖地化を図ったのである。

同様の構造が飯盛城でも見られる。天野忠幸氏の研究により長慶が飯盛築城で最初におこなったのが新羅明神を城内に勧請することだったことが明らかにされている。これは城内に長慶の祖先源新羅三郎義光を祀る行為として注目される。実際に勧請されたか否かはわからないが、私はその有力候補地が御体塚丸ではないかと考えている。

御体塚丸の構造は極めて異常である。元来曲輪とは兵の駐屯場所であり、平らに削平された場である。ところが御体塚丸はそう大きくない曲輪面の中央にマウンド状の岩盤が削り残されている。それはまるで塚のようである。永禄7年に死去するに際して自らの死を3年伏すように遺言し、その遺体を葬ったために御体塚丸と呼ばれるようになったと伝えられている。

一見すると確かに塚のようであるがよく見ると盛土ではなく、岩盤を削り残したものであることがわかる。やはり曲輪造成としては極めてイレギュラーな構造である。おそらく磐座として削り残したものと考えられる。(写真5、写真6)

さらに岩盤の前面が四條畷市によって発掘調査され、塼貼の建物と、石列が検出された。小面積の発掘調査で全貌をうかがい知ることはできないが、やはり通常の城郭施設ではないものが建てられていたようである。加えて出土遺物のなかに脚付土師器皿という中世土器では極めて珍しい形の土器が出土している。口縁部に煤が付着していることより灯明皿として用いられていたことは明らかである。實盛良彦氏によるとこうした脚付土師

器皿は中世奈良町からの出土例があることを指摘し、祭祀に伴う灯明皿であったことを明らかにされている(實盛良彦 2021「飯盛城跡出土の台付皿と「御体塚」」『中世土器研究』141号)。

私は御体塚丸こそが長慶によって勧請された新羅明神社として磐座を造成し、その社として塼貼建物と石列建物が造営されたものと考えている。城内に聖地を造営した事例として評価できよう。

おわりに

天正4年(1576)の織田信長による安土築城は日本城郭の革命的变化であった。石垣、瓦、礎石建物から構成される築城は、それまでの軍事的な防



写真5 岐阜城本丸の岩盤



写真6 飯盛城御体塚丸

御施設としての城郭とはまったく別の施設となった。それは政権のシンボルとしての見せる城の誕生であった。

しかし、中世的な城郭の革命的变化は信長だけが指向したものではなかった。永禄3年(1560)に三好長慶による飯盛築城でも石垣、礎石建物などが導入されていた。また、一乗谷朝倉氏遺跡でも巨石を用いた石垣や、矢穴技法によって割られた石材による石垣構築も明らかとなっている。近江観音寺城でも矢穴技法によって割られた石材が石垣に用いられている。石積みから本格的な石垣を城郭へ導入する変化は決して信長だけではなく、このように各地でおこなわれていたのである。

こうした石垣の構築はそれぞれの特徴を有しており、石垣構築に様々な職能集団の関わっていたことがうかがえる。単純に石積みは近江の穴太とは限らないことを示唆している。飯盛城では巨石使用と折の使用があるが、とりわけ他の城郭石垣では認められない折に特徴がある。このあたりに長慶が動員した職能集団を絞り込むことができそうである。慈照寺銀閣で検出された石垣には花崗岩の石材が矢穴によって割られたことが明らかになっている。これは將軍足利義政によって文明14年(1482)に築かれた東山山荘に関わる石垣と見られる。同様に花崗岩を矢穴技法で割った石材を用いた15世紀後半から16世紀前半の石垣が田辺城(京都府京田辺市)でも検出されており、同一の職能集団によって積まれた可能性が高い。將軍の山荘造営に動員されたことより京都の職能集団であった可能性が高い。

一方、飯盛城の石垣に矢穴技法によって割り取られた石材は確認されていないことより慈照寺銀閣や田辺城に関わった集団とは別の職能集団であった可能性が高い。その実態解明は今後の課題としておきたい。

一方、山上居住は従来の二元的構造を捨てた新たな山城居住形態である。これは山麓の住民に山城に住んでいることを誇示するためではなかったかと考えられる。山麓より見上げさせることが重要だったのであろう。山上で相論の調停や連歌を詠むという政治、文化の空間を設けたことは長慶の居る山を見上げされることが重要だったのであろう。一方で山麓を見下ろすことも重要だったのである。山上で武威と権力を示したのであった。

また、これまで山城と言えば軍事的防御施設としての視点で分析されてきたが、軍事とは真逆の信仰の場としても重要な空間であったことが明らかになりつつあるが、飯盛城では御体塚丸が現存する構造、文献史、考古学から信仰の場として築かれたものであることが明らかにできた。これも今後の城郭研究の典型事例として位置付けられる。

このように石垣、山上居住、聖地論から飯盛城は信長とは違う革命的变化を遂げた戦国時代の山城として評価できよう。



三好氏関連略年表



西暦	和暦	関連事項
1522	大永2	2・13(西暦3・10) 三好長慶、三好元長の嫡男として誕生する。(徳島県三好市芝生城と伝わる。幼名:千熊丸)
1530	享禄3	○飯盛城が、木沢長政の居城として記録に残る。
1531	享禄4	8 畠山 ^{よしたか} 義堯、細川晴元側についた飯盛城の木沢長政を攻める。
1532	享禄5	5 畠山義堯、再び三好家長と飯盛城の木沢長政を攻める。 6・20 細川晴元、浄土真宗本願寺証如と手を結び、三好元長の討伐を命じる。 ⇒三好元長、一向一揆に攻められ堺の顕本寺で自害する。
1539	天文8	7・21 三好長慶、陸海交通の要衝である越水城(兵庫県西宮市)を居城とする。
1542	天文11	3・17 木沢長政、大平寺の戦い(柏原市)で三好長慶・遊佐長教らに敗死する。 9 三好長慶の嫡男三好孫次郎(後に足利義輝から「義」を与えられ義興)が誕生。
1552	天文21	1・28 三好長慶、13代将軍足利義輝と和睦し、御供衆に就任する。
1553	天文22	3・8 13代将軍足利義輝、和睦を破り細川晴元と手を結ぶ。 8・25 三好長慶、芥川山城(高槻市)を接收し居城とする。
1556	弘治2	7 三好長慶、堺の臨濟宗大徳寺派南宗寺を父三好元長のために建設を開始。
1559	永禄2	7 安見宗房、三好長慶との戦いに敗れて、飯盛城に籠城する。
1560	永禄3	1・17 三好長慶、13代将軍足利義輝から相伴衆に列せられる。 1・21 三好長慶、正親町天皇から修理大夫に任ぜられる。 10・24 三好長慶、飯盛城を攻略する。 ⇒安見宗房、飯盛城を明け渡して畠山高政とともに堺から紀伊へ逃げる。 10・27 三好実休、高屋城を攻略して、入城する。 11・13 三好長慶、飯盛城に入城する。 11・19 三好長慶、飯盛城に新羅社勧進のため費用を吉田兼右に相談する。
1561	永禄4	2 三好長慶・義興と重臣松永久秀、13代将軍足利義輝から桐御紋を拝領する。 4・23 十河 ^{そごうかずまさ} 一存(長慶の末弟)が病死する。 5・27~29 三好長慶、飯盛城で連歌会を開催する。(飯盛千句)
1562	永禄5	3・5 三好実休、久米田の戦いで畠山高政・根来寺衆に敗死する。 4・5 畠山高政、八尾の教興寺(三好・松永軍の陣)に進み飯盛城を攻撃する。
1563	永禄6	○三好長慶、ヴィレラやイルマン(修道士)ロレンソに飯盛城下での布教を許可し、キリシタンの保護を命じる。 6・16 イエズス会の司祭ルイス・フロイス(ポルトガル人・31歳)ら来日する。 7 高山飛騨守図書(ダリオ、右近の父、大和国沢城主)・結城山城守忠正進斎(アンリケ)・結城左衛門尉(アンタン、結城山城守忠正の子)、奈良でヴィレラから洗礼を受ける。 8・25 三好義興、芥川山城で病死する。

西暦	和暦	関連事項
1564	永禄7	<p>4頃 ヴィレラ、結城左衛門尉の懇願によりロレンソを飯盛城に使わし説教したところ、二度にわたり三好家の被官70余人がキリシタンになることを決意し、ヴィレラから洗礼を受ける。</p> <p>三ヶ伯耆殿:三箇伯耆守頼照・サンチョ 池田丹後殿:池田丹後守教正・後の若江・八尾の城主・シメアン 伊智地文大夫:南河内の烏帽子形城主・堺の豪族・パウロ 三木判大夫殿:二十六聖人の三木パウロの父 庄林コスメ:三好長慶・義継の秘書、後に羽柴秀次の秘書</p> <p>○この前後に、結城弥平次(ジョルジ・結城山城守の甥)が洗礼を受ける。 ○河内で初めて、砂と三ヶに教会が建てられる。</p> <p>5・9 三好長慶、安宅冬康(長慶の次弟、淡路島の安宅水軍を継ぐ)を飯盛城で殺害する。 7・4 三好長慶、飯盛城で死去する。 ⇒御体塚郭に仮埋葬(仮安置)したと伝わる。</p>
1565	永禄8	○三好義継・松永久通(松永久秀の長男)、3代將軍足利義輝を討つ。
1566	永禄9	<p>6・24 三好義継、真観寺で大徳寺の大林宗套<small>だいりんそうとう</small>の法嗣<small>ほうし</small>である笑嶺宗訴<small>しょうれいそうきん</small>が主導し、京都五山の僧侶が参列して長慶の葬儀を行う。</p> <p>7・4 三好義継、南宗寺で長慶の三回忌を行う。</p> <p>○三好義継、臨濟宗大本山大徳寺に長慶のために聚光院の建設を開始する。 ○松永久秀、足利義昭・織田信長と同盟を結ぶ。</p>
1567	永禄10	○三好三人衆(三好長逸 <small>ながやす</small> ・三好宗渭 <small>そうい</small> ・石成友通 <small>いわなりともみち</small>)と松永久秀が奈良で戦い、東大寺大仏殿が焼ける。
1568	永禄11	<p>9・26 織田信長が足利義昭を奉じて入京。</p> <p>⇒三好三人衆は入京を阻止するが敗れる。 ⇒松永久秀と三好義継は降伏し、大和一国と河内北半国を安堵される。 (松永久秀、信長に名器茶入『作物茄子』を献上する。)</p>
1570	永禄13	○三好義継、正月までに若江城へ移る。⇒飯盛城は城郭としての機能を失う。
1573	天正元	<p>11・16 三好義継、義兄の足利義昭に従って信長と戦うが、義継の家臣で信長派であった若江三人衆の池田丹後守教正・多羅尾綱知・野間左橋兵衛康久らが若江城に信長の家臣佐久間信盛を引き入れ、義継は若江城で自害する。</p> <p>⇒義継の妹は重臣の多羅尾綱知に嫁ぎ、その子(三好孫九郎)が三好姓を継ぐ。その三好生勝<small>なりかつ</small>はのちに浅野氏に仕え、末裔は広島藩士として明治維新を迎える。</p>
1577	天正5	10・10 松永久秀・久通、織田信忠・羽柴秀吉・明智光秀らに信貴山城で敗死する。
1625	寛永2	○三好為三 <small>いさ</small> 【長慶の曾祖父(之長)の弟(長尚)の長男(宗三)の次男】、旗本として徳川秀忠に仕え、南野村(四條畷市)・横小路村(東大阪市)・小山田村(河内長野市)・高向村(河内長野市)で合計二千石余を与えられる。



用語解説

【城郭の施設】

^{くるわ}曲輪(郭): 山頂や山腹などを削って平らにした場所で、用途別に設けた区画のこと。

一般には斜面を削平したあと、進入を困難にするための土塁や石垣を築き、周囲を急斜面にする。

^{おびくるわ}帯曲輪・^{こしくわ}腰曲輪: 厳密な意味での使い分けはないが、基本的に曲輪斜面を囲うように長く設けられたものを帯曲輪、短くポイント的に設けられたものを腰曲輪という。

- | | | | | | |
|-------------------------------------------------------------------------------------|----|-------------------------------------------------------------------------------------|---------|---------------------------------------------------------------------------------------|----|
|  | 曲輪 |  | 土橋 |  | 虎口 |
|  | 横堀 |  | 帯曲輪・腰曲輪 |  | 堀切 |
|  | 切岸 |  | 豎堀 |  | 土塁 |
| | | | |  | 横矢 |

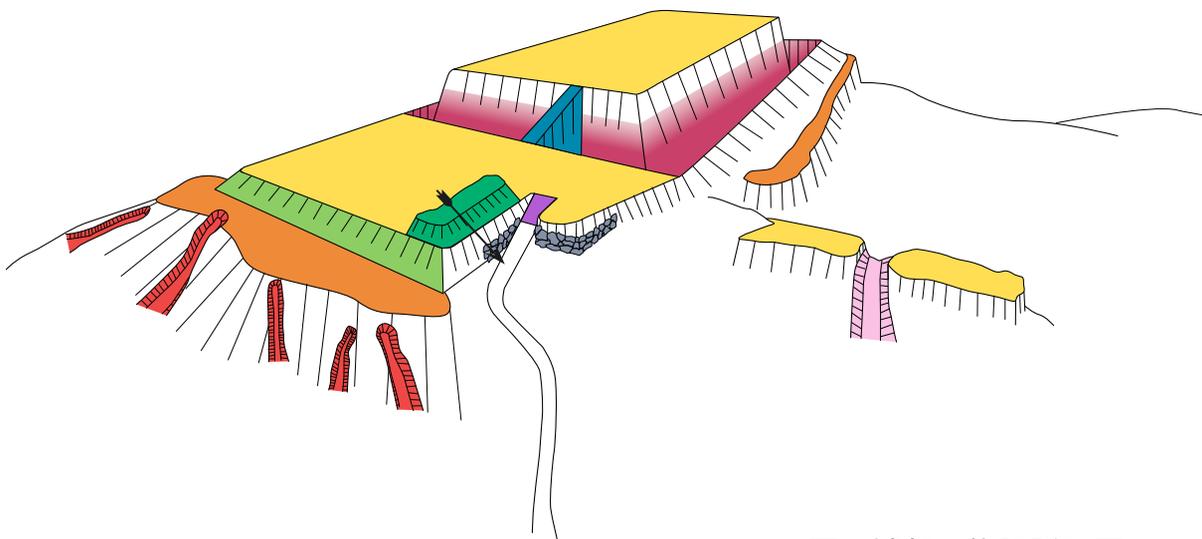


図 城郭の施設説明図

【防御施設】

^{きりぎし}
切岸: 曲輪の周りや防御の強化が必要な場所の斜面を削り、人工的に作った急斜面。

^{どるい}
土塁: 曲輪の縁辺部に土を盛って、敵の進入を防ぐために構築した堤防状の土壁。

^{ほりきり}
堀切: 山の弱点となる尾根伝いに侵入する敵を防ぐため、尾根筋を分断する空堀。

^{たてぼり}
豎堀: 山の斜面を回り込んで攻め登る敵を防ぎ、斜面の横移動を困難にするために、山の斜面にそって豎に掘られた空堀。

3本以上の豎堀を並べて掘ったものを^{うねじょうからほりぐん}敵状空堀群と呼ぶ。

^{よこぼり}
横堀: 山城で土塁や曲輪に沿って掘られた空堀。発達したものは城全体を囲み、城域を区画するものもある。

^{こぐち}
虎口: 城や曲輪の出入り口とこれを守るための施設。虎口は単に出入り口の門のみをいうのではなく、出入り口の周囲の施設も含めて呼ぶことがある。敵の侵入を阻止するとともに、出撃にも有利なように工夫が重ねられ、出入り口を左右互い違いにした^{くちが}食い違い虎口や出入り口を二重の門と間に空間をもつ^{ますがた}櫨形虎口などがある。

^{よこや}
横矢: 城内に侵入する敵に対して、側面から攻撃することを可能にした施設。

虎口側面の曲輪を張り出すことにより、虎口に向かう敵を側面から攻撃できる。

MEMO

国史跡指定記念・三好長慶生誕500周年記念・飯盛城跡調査報告会

クローズアップ 飯盛城 2022 資料集

令和4年(2022)7月23日発行

編集 四條畷市教育委員会

発行 四條畷市教育委員会
大東市
四條畷市立歴史民俗資料館
大東市立歴史民俗資料館

印刷 株式会社 近畿印刷センター